

2色の粘土を握った塊から

—— マーブル模様の不定形に目玉をつけて ——



表現内容の要素と発想の視点

- ・表現材料：2色の粘土
- ・造形要素：偶然の不定形
マーブル模様
- ・表現技法：手びねり
擬人化
- ・表現様式：抽象形
- ・表現対象／主題：表現者が
思考、追究、決定する

写真1 「小さな哲学者」
〔約1230℃焼成／無釉〕
（高さ約8cm）

造形発想と表現について

粘土を布に包んで手でギュッと握り、塊をそっと取り出す。偶然にできた不定形の粘土から発想を広げ、形の面白さを生かした創作を楽しむ表現である。

ここでは、さらに色の違った2色の粘土を組み合わせてマーブル模様にし、色のコントラストも表現に生かしていく。2色の粘土に、テラコッタ粘土と楽焼用粘土を使った。

まず、テラコッタ粘土と楽焼用粘土をひも状に延ばし、相互に絡めるように組み合わせ、それらを丸めて粘土の塊をつくる。

それを布に包んで手のひらでギュッと握ると偶然にできた不思議な形が現れる。

テラコッタ粘土と楽焼用粘土の茶色と白色の違いからできるマーブル模様は、造形的なイ

メージをさまざまにふくらませてくれる。

そのマーブル模様の不定形の塊をさまざまな角度から見つめ、造形的に面白いと思われる個所を見つけ、底面をつくって固定する。

それに思い思いに「目玉」をつけると、ただの粘土の塊が、にわかに「人」や「空想の生き物」などに生まれ変わる。

不定形に「目玉」つけて擬人化する発想の面白さである。

用具／材料

テラコッタ粘土と楽焼用粘土（各約100g）、どべ、布（綿布／麻布）、粘土べら（各種）、粘土板、筆、雑巾ほか

表現のプロセスと内容

● 2色の粘土でマーブル模様の不定形の塊をつくる

- ・テラコッタ粘土と楽焼粘土をひも状に延ばす。(写真2)
- ・2色のひも状粘土を絡ませるように組み合わせる。(写真3)
《このとき、できあがるマーブル模様(白と茶色)の塊をイメージする。》
- ・粘土を布に包み、手で包むように握り、不

定型の塊をつくる。(写真4・5)

《不定形の造形的に面白い形、楽しい形が生まれるように意識的に握る。例えば、全体の形の凹凸や歪み、皺のでき方など。》

● マーブル模様の不定形からつくりたいものを発想してつくる

- ・不定形の粘土の塊やマーブル模様などからつくりたいものを見つける。



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6



写真7



写真8



写真9



写真10

- つくる方向を決め、粘土の塊を板に押しつけ、底面をつくって立てる。(写真6)
- 目玉をつける位置を決め、粘土べらの先で目玉を埋める穴を開ける。(写真7)
《目の位置は左右対称とは限らない。例えば位置をずらすとおどけた表情が出せる。》
- 目玉を埋め込む穴にどべを筆で塗る。(写真8)
- 生地の色と反対色の粘土を丸めて目玉をつくって穴にはめ込む。(写真9)
《生地の色と反対色の粘土を使って

目玉をつくると色のコントラストが生きる。》

- 粘土べらの先で目玉に瞳を入れて完成させる。(写真10)
- 《笑う、怒る、泣く、おどける、いじけるなど、表現したいイメージに合わせて瞳の表情を工夫する。》(写真11)



写真11 成形後、約10日間乾燥させた作品

表現のバリエティ

写真12 焼成完成作品
〔約1230℃焼成／無釉〕
(高さ約5～8cm)



写真13 完成作品
「鳥のマントル」
〔約1230℃焼成／無釉〕
(高さ約8cm)



写真14 完成作品
「ころもマスク」
〔約1230℃焼成／無釉〕
(高さ約6cm)



写真15 完成作品
細かくマーブル模様を練って。
「だよね!」と「へー助?」
〔約1230℃焼成／無釉〕
(高さ約6～8cm)

制作協力者

・東京都葛飾区立白鳥小学校 朝重久美子

応用・発展 表現

2色の粘土を握った塊から

—— マーブル模様到手足もつけて ——

造形発想と表現について

「2色の粘土を握った塊から」の発展表現である。ここでは、さらに「手」や「足」などを表情豊かにつけて表現を楽しむ。

手足は、粘土をひも状に延ばし、体に押し込むようにしっかりとつける。体と手足の粘土の色の違いを生かすようにしたい。

底面をつくって体を固定しても、手足で体を浮かせるようにつくってもよい。

目玉と同様、手足の形や位置、曲がり角度など、表情のつけ方を工夫すると楽しい表現になる。



写真 16 完成作品 手をつけると！「あれれ？」と「おねがい！」〔約 1230℃焼成／無釉〕（高さ約 6 cm）

表現のプロセスと内容

※目玉に瞳を入れるまでは前項と同様である。

- ・テラコッタ粘土と楽焼粘土をひも状に延ばす。

《体を手足などで浮かせるようにつくるときは、足のつけ根が太くなるように粘土を円錐状にしてつけると安定する。》（写真 17）

《このとき、テラコッタ粘土と楽焼粘土の色の違いを生かすように体と手足のコントラストを考えてつくる。手のひらや足先など、細かいところまで工夫したい。》

- ・手足に「どべ」をつけて、体にしっかりと



写真 17



写真 18

つける。（写真 18）

《粘土べらで窪みをつくり、手足を体に埋め込むようなつもりでもよい。》

《手足を曲げて立てる位置を安定させたり、表情をつけたりする。特に手の表情は表現効果が大きく大切である。》



写真 19 成形後、約 10 日間乾燥させた作品（高さ約 5～8 cm）



写真 20 焼成完成作品「カモン君」〔約 1230℃焼成／無釉〕（高さ約 5 cm）